



やがて母は家衡を生むが、清衡はその異父兄弟と争うことになる。清衡は後三年の役で源義家のたすけをかりてこれを屠り、陸奥と出羽にわたる豪族となった。彼は財力にものをいわせて平泉に中尊寺・毛越寺・金色堂の建立を企て、藤原三代の基礎を築いた。

二代基衡は父の意志をつぎ、毛越寺の再建を行った。三代秀衡は毛越寺を完成し、宇治の平等院を模して造った無量光院を中心に一族や家来の館を整然と区画して構え、鎌倉以北第一の都として人々の眼を驚かせた。中央の兵乱をよそにこうして彼は「北方の王者」として君臨したのである。

そのころ都では院政が崩壊し始め武家政治の体制を取りつつあった。そんな中で秀衡は義経を迎え新体制を取ろうと計ったが、多くの難を残したまま世を去った。

後をついだ泰衡は凡才の身であり、腹臣の川田次郎に暗殺され、鎌倉幕府の支配下になった。今日にみられる平泉文化は豪華壮麗をきわめた昔のほんの一部にすぎない。丘の上の杉木立の間に、もろそうに残っている中尊寺は弥陀堂・鐘楼・弁慶堂・彌伽堂・経堂・金色堂などのほかはすべて廃墟で、毛越寺も無量光院も今はない。

五月雨の降りのこしてや光堂

金色堂は套堂のおかげで、800年の五月雨にも昔の壮麗さをとどめている。それを1億2千万円をかけて新しい昭和の生命力を与えようと、解体修復作業が進んでいた。

世界でも稀な存在だという三代のミイラも、多くの仏像も今は鉄筋コンクリートの讃衡蔵に納められている。

○当時の史料「吾妻鏡」より

関山弘台寺院・中尊寺

寺塔四十余宇、禅房三百余宇なり。清衡六郡を管領するの最初これを草創す。(中略)当国の中心を計り、山頂の上に一基の塔を建つ。又寺院中央多宝寺あり。(中略)次に釈迦堂。(中略)次に両界堂。(中略)次に二階大堂。(中略)次に金色堂。(後略)

嘉祥三年(850)に天台の僧慈覚大師により開山、後に清和天皇の詔で清衡が再興してからは東北屈指の大寺院となり有名になった。清衡は長治二年(1105)二月最勝院を建立しついで嘉承二年(1107)大長寺院が完成し翌年の天仁元年(1108)には、金堂、塔婆、鐘楼、経堂、大門、金色堂その他の諸堂が完成した。

その後基衡、秀衡も寺城を広げたもので当時は堂塔四十余り、禅房三百余りを数えたという。総供養は大治元年(1126)行なわれた。

造寺の主旨はひとえに鎮護国家のためであり、又前九年、後三年の役の敵味方の犠牲者の霊

を浄土へ導き、寛治以来三十余年の間出羽、陸奥を支配して来たことを感謝し、特に白河法皇・崇徳天皇・鳥羽上皇・同中宮待賢門院の長寿を祈り、自己の極楽往生を願って造寺にあつたということが総供養の時の供養願文に記されている。

藤原氏の滅亡後は源頼朝が寺領を保護し堂宇の修理等も行なつたが次第に荒れ衰え建武四年(1337)野火にあい伽藍の大半を焼失した。この時類焼をまぬかれたのが金色堂と経蔵で今日藤原氏の榮華をしのぶ貴重な遺構となつている。現在の境内は東西1.8 Km 南北1 Km 僧坊は十八ある。

医王山毛越寺

堂宇四十余宇、禅坊五百余宇なり。基衡これを建立す。まず金堂は円隆寺と号す。金銀をちりばめ紫檀、赤木等を継ぎ万宝を尽くし衆色を交う。(吾妻鏡以下略)

毛越寺は嘉祥三年(850)慈覚大師の開基でその後藤原二代基衡が蓄積した富と権力にものをいわせ、金堂円隆寺、七堂伽藍を造営したが、それらは畿内の文化を生身に模したといわれている。秀衡に至って完成充実された。円隆寺の仏像は雲慶の作と伝えられる。京で製作したがみごと出来ばえだつたので鳥羽上皇がこの仏像を京から運び去るのを惜しんだという話が残っている。規模の広大なこと中尊寺をしのぎ奥州藤原氏の榮華を広く世に示すものであつた。嘉祿年間(1226ごろ)野火のため類焼して以後年ごとに衰え今は南大門跡西北になだらかな山容をみせる塔山と大泉池の間に二三の堂宇が残るのみとなつた。しかし南大門跡、金堂円隆寺跡、根本中堂であつた嘉祥寺跡の大礎石がそのまま残っており、その盛時のさまをしのばせる。また庭園は広大な浄土式庭園で建設当時そのままの形で残っており平安時代の庭園技術がしのばれる。

無量光院跡

秀衡これを建立す。ことごとく以て宇治の平等院を模すところなり。(以下略)

駅の北800米、中尊寺への途中左手の田園の中にある。三代秀衡の建てた寺で土壇、礎石等が残っている。建物ばかりでなく向きも地形も平等院によく似ている。猫田が淵は宇治川に東福山は宇治の朝日山にかたどつたものである。平等院にみられないものとして池中に中島があること中島前庭に塙が敷きつめていふことである。

庭園は浄土曼荼羅を地上に移して極楽浄土をかたどつたものでこれも代表的浄土庭園であつた。最近の調査で特別史跡に指定された。

○藤原氏はこの地方に生長した豪族であるが京都の藤原氏と連絡をつけて自らも藤原氏と称したように、文化も又京都にあつたがれ都で信仰の厚かつた寺社を平泉に勧請している点等何と

とによらず都の文化を導入しようとした意図がみられる。平泉文化を一口でいい表わすと古代末期の貴族文化を生身に模倣しようとした黄金文化であるといえる。壮麗な寺院を建立したが火災にあい今日残るものはその一部にすぎない。しかし中世の改革を経ないで遺跡化したので当時の地形がそのまま今日に保たれたという類例の少ない遺跡である。

○平泉の文化財

建造物

金色堂(国宝)

三間四方、単層、宝形造り木瓦葺の堂で平安朝様式の代表的な格調を備えている。内外ともすべて布をはり黒漆を塗り金箔を押してあるので金色堂と呼ばれる。

内部の仏壇と高欄、母屋の柱と長押、組物、^{壁龕}墓殿や月輪の内に仏像を蒔絵で描いた巻柱等は経費を惜しまず大変豪華に造つてあり藤原後期における装飾工芸の粋といわれている。なお金色堂は正応二年(1288)これを保護するため北条貞時がさや堂を建てたので、これにおおわれたまま現在に至っていたが目下解体修理中でさや堂は別の場所に復元されている。金色堂の工芸美術上の価値は世界的で建造物としては新国宝第一号の指定を受けている。

経蔵堂(重要文化財)

方3間、単層、宝形造り、中尊寺伽藍の一部として建立(1108)正面入口の上の鴨居にあるうんげん彩色の宝相華唐草の構様が当時のまま残されている。

内陣の八角須弥壇は藤原期美術の最高の作として金色堂と共に有名。経棚に清衡、基衡、秀衡奉納の「一切経」をおさめてある。

金色堂覆堂(重要文化財)

方5間、単層、宝形造り、金色堂保護のため建てた鎌倉時代の特殊な設計の建造物、現在は解体し移築された。

中尊寺 護衡蔵

中尊寺山内に残る重要文化財を収めるため建てられものである耐震、耐火、採光、通風等を考慮に入れて設計せられた近代建築でありながら、なお平安様式を取り入れている。金色堂が完成されるまで3つの須弥壇の仏像もここに移されており細部まで十分拝観が可能である。陳列品では有名な一切経のほか仏具、副葬品等がある。なおここに秘仏の湛慶作の一字金輪仏が納められている。